

# 平家物語の研究

— 平清盛について —

宮 地 由 香

## 目 次

はじめに

第一章 清盛の人間形成

第一節 平家の悲願

第二節 忠盛の昇殿

第三節 清盛の権力意識

第二章 悪行といわれるもの

第一節 たけき人・清盛

第二節 王法に対する悪行

第三節 仏法に対する悪行

第三章 「入道死去」に見られる清盛像

第一節 「二位殿の夢」と世評

第二節 遺言から考察される清盛像

おわりに

## はじめに

『平家物語』に初めて触れたのはいつだったのだろうか。中学校の授業で「敦盛の最期」を学んだことを記憶している。その時はまだ『平家物語』が何について書かれたものかさえよくは知らなかった。しかし、まだ若くて美しい敦盛が、熊谷次郎直実によって頭をとられるその話に、何か映画の一シーンを見たような新鮮な感動を覚えた。それから私は、高校・短大で様々な古典に触れる機会を与えられ、古典への興味を増していった。そして今、卒業論文を書くにあたって、多くの古典の中からこの『平家物語』の研究ということ、そのテーマに決めたのは、やはり中学時代の感動が忘れられなかったからだと思う。

さて、それでは具体的に何に焦点をあてて研究したらよいか、ということを考える為に『平家物語』を読んだ私は、作品の主人公の一人である平清盛に興味を持った。それは、この作品における清盛の印象が「悪人」としてあまりにも統一されているからである。そ

こで、清盛の「悪」というものを、彼自身の内面と他者の評価という二面から考えていき、彼の間像を探ってみたいと思う。

以上の二面を考察する為に、私はこの論文に次の三章を設けた。

第一章では、清盛の父・平忠盛の昇殿のエピソード「殿上閣討」(巻第一 P 36 ~ 41)を中心に、清盛の精神形成の過程について考察し、第二章では、清盛の悪行とよばれるものを取り上げて、彼の行為を「悪」と判断した人々の意識について考えてみたい。そして第三章では、清盛の死を中心に、彼がどのような信念でどのように生きたのか、そして、それが人々の目にはどう映ったのかということ考察し、『平家物語』における清盛の間像を明らかにしていきたいと思う。

なお、原文は全て小学館の『日本古典文学全集29「平家物語(一)」(昭和48年版 市古貞次校注・訳)から引用し、( )内は出典とペー지를表わす。

## 第一章 清盛の間形成

### 第一節 平家の悲願

其先祖を尋ねれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王、九代の後胤、讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。

(巻第一「殿上閣討」P 35 ~ 36)

『平家物語』の中では、清盛の系図について、以上の様に書き記し、清盛が皇室の出であることを示している。つまり、清盛の先祖は桓武天皇であり、家柄・血統共にその周辺の貴族にはひけを取らない由緒正しい出であった。その後、高皇王の時に平の姓を賜り、

皇族の籍を離れて人臣の列に連なつてからは、昇殿さえも許されない受領階級に属さなければならなかつたのである。

当時の政治・文化の中心を担つていたのは、皇室を中心とする貴族階級であった。故に中央に於て、自分の地位をある程度確立する為にはその大前提として、内の昇殿を許された殿上人となる必要があつた。殿上人となり、一族を繁栄させたいという望みは、誰もが一樣に持つていたことであろう。とりわけ、天皇が先祖であるというプライドを持ちながら、長く諸国の受領として地下人の地位に甘んじなければならなかつた平家一門にとって、それは代々の悲願であつたと言つてもよいだろう。

その悲願を実現した人こそ、清盛の父・平忠盛である。この時の事情について本文では、

忠盛備前守たりし時、鳥羽院の御願、得長寿院を造進して三十三間の御堂をたて一千一体の御仏をすゑ奉る。(中略)上皇御感のあまりに内の昇殿をゆるさる。

(巻第一「殿上閣討」P 36)

と記している。一地方の受領が天下の上皇に大寺院を造進したのである。このことから忠盛の豊かな財力を知ることができるが、同時に、地方武士の新しいエネルギーが古い貴族政治に取つて代わろうとしている時代の動向を伺い知る事ができる。

忠盛は自らの財を足がかりとして、天承元年(一一三一年)三十六歳で初めて内の昇殿を許された。この時、嫡男清盛は十五歳であつた。

## 第二節 忠盛の昇殿

忠盛は、鳥羽上皇に対する年来の奉公心と、その財力によって宿願の内の昇殿を勝ち得た。しかし、おもしろくないのは貴族達である。もともと閉鎖的でプライドの高い貴族達にとって、一介の受領級の者が上皇に寺を造進する程の財力を持っているということだけでも苦々しい事なのに、そのうえ殿上人として自分達と同列に連なるなどということは、許し難い事であったに違いない。そこで、雲の上人是を猜み、同じき年の十一月廿三日、五節豊明の節会の夜、忠盛を闇打にせむとぞ擬せられる。

(巻第一「殿上闇討」P 37)

という事件が起こるのである。

しかし、忠盛はこの噂を事前に漏れ聞く。そして、われ右筆の身にあらず。武勇の家に生まれて、今不慮の恥にあはむ事、家の為、身の為、心うかるべし。せむずるところ、身を全うして君に仕へむといふ本文あり。

(巻第一「殿上闇討」P 37)

と言つて、あらかじめ対処の方法を考え、準備して、無事に貴族達の謀略をかむことに成功する。それは、忠盛の武人としての勇氣と知恵を読み取ることができると同時に、武人であるが故の弱点を示していた。その事を示すのが次のエピソードである。

忠盛が御前に召されて舞を舞ったその時、連座していた貴族達は歌の拍子を変えて、「伊勢平氏はすがめなりけり」(巻第一「殿上闇討」P 38)と歌つてはやしたてたのである。この座興に対して忠盛がどの様な態度をとったかといえは、

いかにすべき様もなくして、御遊もいまだ終らざるに、偷かに罷出でらるる

(巻第一「殿上闇討」P 38)

となつてゐる。武略では、誰にも引けを取らない忠盛も、この諷刺の一言の前には手も足も出ず、すすすすと涙をのんで逃げ帰るしかなかった。

地方の武家に生まれた忠盛は、素朴で率直な人間関係の中で育ったが故に、貴族社界の陰湿な風習を理解できなかったし、地方出身者という意識を少なからず持っていたであろう。その忠盛の舞に対して、「平氏と瓶子」・「眇と酢甕」を掛けた即興的な変え歌ではやしたてる機知諧謔の巧みさ。それは余りにも巧みであるが故に、貴族的宴席の風習にほとんど触れることなかった忠盛の心には、痛烈な侮辱として響いたのである。尤も、本文中にも記してあるように、歌詞を利用して他人を諷刺的にはやしたてるという座興は貴族の常套手段であったから、忠盛としても、そうまで気にする必要はなかったのである。「ああ、してやられたな」程度に受け止めて、悠然と構えていればそれで済んだのである。しかし、それができずに憤慨して酒宴の途中で席を立つて出ていかなければならなかった所に、忠盛のいかにも武人らしい率直さと単純さがある。

逃げ帰った忠盛を見て貴族達は「やはり忠盛は成り上がりの田舎者だ」という認識を深めたことだろう。そして同時に、貴族達に後ろを見せて逃げ帰った事で、忠盛は貴族に対する負い目を感じなければならなくなる。こうした忠盛の貴族に対するコンプレックスは、その嫡男である清盛の精神形成にも大きな影響を与えたであろうと思われる。

### 第三節 清盛の権力意識

忠盛は、仁平三年（一一五三年）正月十五日に、五十八歳で世を去った。ここに三十七才の清盛が平家の総領として、一門の運命を担うことになるのである。

清盛は、保元・平治の乱におけるめざましい活躍が認められ、勲功一つにあらわず、恩賞は重かるべし

（巻第一「鱸」P42）

ということ、トントン拍子に出世し、遂に仁安二年（一一六七）には太政大臣従一位となるなどの異例な出世をし、最高の権力を手に入れたのである。まさに、

此一門にあらざらむ人は、皆人非人なるべし

（巻第一「禿髮」P44）

という、平家最盛期の花が開くことになる。清盛とその一族の栄華有様を本文では、

大将にあらねども、兵杖を給はって隨身を召し具す。牛車輩車の宣旨を蒙って、乗りながら宮中を出入す。偏に執政の臣のごとし

（巻第一「鱸」P43）

吾身の栄華を極むるのみならず、一門共に繁昌して、嫡子重盛、内大臣の左大将、次男宗盛、中納言の右大将、三男知盛、三位中将、嫡孫維盛、四位少将、すべて一門の公卿十六人、殿上人卅余人、諸国の受領、衛府、諸司、都合六十余人なり、世には又人なくぞ見えられける。

（巻第一「吾身栄花」P46）

と記している。ここで注目すべきことは、清盛は武人でありながら、その栄華の様があまりにも貴族的だという点である。

もちろん、いくら力があるといっても、清盛の様な武士階級の地位は、一般的に認められていなかった。又、昔と比較していくらから弱体化してきたとはいえ、天皇・貴族階級の伝統的権威には根強いものがあつた。こうした状況の中で、清盛が天下を掌握する為には、自らがその貴族組織の中に入り込んで、かれらと妥協しながら自己を強大化するより他はなかったであろう。と同時に、その一方では豪族の棟梁として、地方の新興武士勢力の代表者となることも、清盛に課せられた重大な使命であつたはずである。そういった意味で、彼は、藤原摂関時代とは違う、新しい体制を整える必要があつたのである。

また、清盛自身、決して時代の要求に答えられないような人物ではなかった。例えば、松本新八郎氏も清盛について、「音戸の瀬戸を開いたという伝説にしても、また大輪田泊を築いたことにしても、彼が新時代について眼の見えぬ人物ではなかったことを示しています。」（「清盛」P55『国文学』解釋と鑑賞』昭32・9）と指摘されている。その清盛が、何故に、自らを貴族化させることに殊更に執着したのであろうか。このことを考える時に、先に述べた父・忠盛の、貴族に対するコンプレックスが、その要因になっていると思うのである。

忠盛が殿上に於て貴族達によって辱しめられたことは、清盛にとつても大変情けなく、悔しい事であつたに違いない。だからどんな貴族にも引けを取らない地位と権勢を手に入れ、父の無念を晴らし

たいということ、強く願望する様になっていったのではあるまいか。その為に清盛は急速に貴族化していく。そして、誰からも侮られることのない身分を手に入れようという意欲は、清盛の強烈な自衛意識を形成していったと思われるのである。

やがて清盛は天皇の外祖父という最高の地位と権力を手に入れ、一代にして一門を異常な繁栄にまでの上げた。そして清盛はその繁栄を守ることに、「死」の直前まで彼の全神経を突らせた。彼の権力意識の強さは、例えば髪を禿に切った童を京中にばら撒いて、平家の悪口を言う者を取り締まったという話(巻第一「禿髪」P 44~45)や、鹿谷での謀反計画が露見した時に、清盛がいかに慌て、いかに怒ったか(巻第二「西光被斬」P 119~128)などからもその憤激が想像される。権力意識が強ければ強い程、権力を失うことに対する不安も大きくなるものだ。とりわけ、武士の棟梁でありながら、貴族化へと傾斜していき、結局、どっちつかずで不安定な立場にたたざるを得なかった清盛にとって、その猜疑の不安は人一倍甚大なものであっただろう。

彼は、この不安を取り除き、自己の権力を最大限に守る為に戦った。自己の権力を死守しようとする彼の前にはいかなるモラルも存在しない。彼にとって重要なのは一族の繁栄のみであり、それを守る為には、他者を容赦なく排斥していく。その彼の心の中にあるのは、「自分がよければ、他の者はどうなってもよい」というエゴだけなのである。こういったエゴは、人間誰もが一樣に持っている意識であって、何も清盛だけの特別なものではない。しかし、清盛は特に自らのエゴを強烈に行動に移した。その結果、多くの人々が悲惨な運命をなめさせられたり、希望を絶たれることになってしまっ

たのである。彼らは清盛を恨み、憎む。こうした人々の悲しみや呪いが、清盛を「悪」の暴君としてとらえていくことになったのだと考えられる。

そこで次の章では、清盛の悪行とよばれている行跡に対する他者の意識を中心にして考察していきたい。

## 第二章 悪行といわれるもの

### 第一節 たけき人・清盛

『平家物語』において、主人公の平清盛が、どの様な人物としてとらえられ、描かれているかを見る為に、巻第一「祇園精舎」を見てみよう。ここでは、「おごれる人」・「たけき人」として名を馳せた人物を、中国・本朝にわたって列挙した後で、

此等はおごれる心もたけき事も、皆とり／＼にこそありしかども、まぢかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人の有様、伝へ承るこそ、心も詞も及ばれぬ。

(巻第一「祇園精舎」P 35)

と、清盛について語っている。つまり、清盛は、中国・日本を通じて、最も猛々しく、奢り高ぶった人物としてとらえられている。そして、この清盛のイメージは『平家物語』の全編を貫いている。

清盛という人物を、現実存在した一人物として考えてみるとき、この清盛像が非常に偏ったものであることに気づく。ここで留意すべきことは、「たけき人」あるいは「おごれる人」という清盛観は、時の権力者・平清盛に対して、様々な人々が、それぞれの身分・立場でもって、自分との関わり方によって身勝手に評価したも

のである。その人達の一人一人の主観的判断の共通分母を引き出してみた時、「たけき人」あるいは「おごれる人」という清盛観が、当時の人々には、最も真実味のある清盛像として残ったのである。こうした人々の目は、さらにまた、清盛を「悪人」としてとらえ、平家一門の滅亡をその「報い」としてとらえようとしている。次に、清盛を「悪人」と判断した人々の意識を考察し、清盛の悪行とよばれるものの持つ意味について考えてみたい。

## 第二節 王法に対する悪行

富倉徳次郎氏は、『平家物語―変革期の人間群像―』の中で「清盛の悪行は王法への悪行と、仏法への悪行との二つで捉えられる」（P40）と指摘されている。

まず「王法への悪行」とよばれるものについて考えてみたい。

富倉氏は、この、「王法への悪行」というものを次の四つに分類されている。すなわち、(一)殿下乗合事件、(二)鹿谷事件、(三)以仁王の死、(四)福原遷都である。(以上P40～44)この四つの事件のあらましについて、若干の説明を加えておきたいと思う。

(一)「殿下乗合事件」というのは、清盛の嫡男・重盛の息子である平資盛が、摂政藤原基房の行列を騎馬で通り抜けようとした所、その無礼を咎められ、馬から引きずりおろされるという辱めをうけた。これに怒った清盛は、その後三百余騎の兵をもって参内の摂政の行列に乱入し、御隨身の鬚を切るといふ暴挙をおこなったのである。これについて本文では、

これこそ平家の悪行のはじめなれ

(巻第二「殿下乗合」P80)

という批評を載せている。次に、(二)「鹿谷事件」というのは、京都東山の麓の鹿谷で、後白河法皇を中心として、大納言成親・西光法師・俊寛らが平家討伐の計画をたてた。それが露見すると、清盛は、成親を備前に流し、西光を六条河原に斬り、俊寛らを鬼界が島に流すという厳しい処罰を独断で行った。その上、後白河法皇を鳥羽殿に幽閉しようとしたのである。この時は、重盛の諫言によって断念しているが、清盛の遺恨は長く尾をひき、重盛の死後、法皇幽閉を断行した。(三)「以仁王の死」、以仁王というのは、後白河法皇の御子である。以仁王は源頼朝と共に平家討伐を企てたが、宇治河畔の合戦の折、流れ矢に当たって亡くなられた。(四)「福原遷都」というのは、治承四年(一一八〇年)の都遷りのことである。

以上の四つの事件に共通して言えることは、これらは皆、清盛が貴族・法皇といった人達の伝統的権威を無視し、踏み躪った事件である。(一)は摂関家という大貴族に対する反抗であり、(二)は貴族や法皇に対する暴挙である。(三)の法皇の御子を殺害したということは、皇室の権威を無視した行為の最たるものである。また(四)は、貴族の培ってきた伝統・文化を全て否定する行為として捉えることができる。この様に、「王法への悪行」とは、貴族的なものを否定する行為のことだと考えられる。では何故、貴族的なものを否定することは「悪」であると考えられるようになったのだろうか。

第一章でも述べた様に、清盛は、自分と一門の人々の繁栄の為ならば他者の立場を省みなかった。それは、彼が自己の権威を最大のものとすることによって、誰よりも栄繁に対する願望を強く持っていたからである。しかし、それは必ずしも清盛だけのことではな

い。誰しも自分が一番可愛いという意識を持っている。誰に憚ることもなくほしいままに権力を行使して、大いに時勢にあって栄達したいと願うのは当然のことである。この欲望は、清盛だろうが、貴族であろうが、あるいは法皇であろうが変わりはないのである。だから、清盛がその権威を獲得するために努力した様に、貴族達も自己の権威を保守しようと必死になっていたのである。

生粋な宮廷貴族ではない清盛が、貴族・皇室といった伝統的・絶対的権力者をさし置いて、自らが最高の権力者となることは、そのこと自体が貴族達の誇りとする伝統的権威を否定する行為なのである。当然、貴族達は自らの権威を守る為に、清盛の持つ権威を否定しなければならぬのである。ここに、清盛と貴族達が絶対的に対立する所以がある。

以上の様に考えてくると、清盛と貴族勢力の対立には、自分が栄える為には他者を踏み躪ることも厭わぬという人間のエゴイズムによるものだとわがかる。

さて、この二者の対立の結果、自己繁栄に対する強烈なエネルギーを持つ清盛の力は、長年古い権威の上に胡座をかいていた貴族達の力を圧迫してゆく。しかし、平家一門の繁栄を、清盛の権威を黙って認めるわけにはいかない。そこで、自分達に対立する清盛の行為を「悪行」と定義づけることによって、清盛の権威そのものを否定しようとしたのである。

「悪」ということを意識する時、それに対するものとしての「善」が意識の内側に存在する。貴族達は、清盛を「悪人」とみなすことによって、自分達を「正しい者」と自認し、そうすることによって自らの権威を揺ぎないものと考え同時に、清盛の権威を価値のない

ものとして否定しきろうとするのである。

先にあげた「四つの悪行」も、以上のような理由から、「悪」と判断されたのだといえよう。つまり、「王法への悪行」とは、清盛と貴族らの自我意識の対立の中で、貴族が自らを正当化する為に生まれた意識であって、客観的善悪という意味においては悪ではないと私は考える。

### 第三節 仏法に対する悪行

次に「仏法に対する悪行」というものについて考えてみたい。「仏法に対する悪行」とは、主として奈良炎上による東大寺・興福寺の焼失事件を指す。奈良の僧兵との衝突によって出兵した平重衡が、夜戦の為に、民家に放った火が、はからずも東大寺・興福寺を焼いてしまったのである。

『平家物語』によれば、もとより清盛には南都を攻める意志はなかった。それは、奈良で蜂起した興福寺の大衆を鎮圧する為に、瀬尾太郎兼康を大和の檢非違使に任じた時に、清盛が、  
相構えて衆徒は狼籍をいたすとも、汝等はいたすべからず。物具なせそ。弓箭な帯しそ。

(巻第五「奈良炎上」P44)

と言っていることからわかる。しかしこの様にして派遣された兼康の余勢六十余人の頭を、南都の大衆が斬ってしまったため、清盛は大いに怒り、「さらば南都を攻めよや」(巻第五「奈良炎上」P44)と言って頭中将重衡を派遣するのである。そして、ここに奈良炎上という歴史的大事件が起こるのであるが、これもまた、清盛、あるいは重衡の意志によるものではなく、全く偶発的に起こってしまった

たのだということが本文には記されている。

夜いくさになって、くらははくらし、大將軍頭中將、般若門の前にうったって、『火をいだけ』と宜ふ程こそありけれ、平家の勢の中に、播磨国住人、福井庄下司、二郎大夫友方といふ者、楯をわり、たい松にして、在家に火をぞかけたりける。十二月廿八日の夜なりければ、風ははげし、ほもとは一つなりけれども、吹きまよふ風に、おほくの伽藍に吹きかけたり。

(巻第五「奈良炎上」P 415~416)

このように見てくると、奈良炎上という大事件にはいくつかのステップがあったことがわかる。もしも、清盛が瀬尾太郎兼康を派遣した時に南都の大衆が静まっていたとしたら、もしも、夜戦となる前に勝負が決していたなら、あるいはもしも、その夜、風が吹かなかったとしたら、この大事件は起こらずに済んだかもしれないのである。このように考えてくると、事件の裏に何か人間の力を越えた力が働いて、清盛に寺を焼かせたかのようにさえ感じられる。

東大寺・興福寺の焼失事件は、

我朝はいふに及ばず、天竺震旦にもこれ程の法滅あるべしとも思へず、

(巻第五「奈良炎上」P 418)

という恐ろしいできごとであり、因果応報の仏教思想から考えてみても、清盛は当然この報いをうけなければならぬのである。やがて清盛は熱病で「あっち死」(巻第六「入道死去」P 442)した。彼の死を人々は一樣に仏罰として捉えるのである。このことについては、次の章で述べるとして、彼の死の直接の原因ともいわれるこの「奈良炎上」事件が、彼の意志を越えた力によって起こったという

ことは、一体何を意味しているのだろうか。

私はここに清盛が減びなければならない運命といったものを、当時の人々が感じていたのではないかと思う。即ち、悪人である清盛は、彼自身の意志に関係なく、悪行を行わねばならない運命にあり、当然、そのために滅びる運命の星を持っている人物だという考え方である。そして、そこに、彼の「あっち死」の必然性を見出だそうとしているように思えてならない。

以上、清盛の悪行ということについて考えてきたが、次の章では、その悪行の報いと信じられた彼の死について考えてみたい。

### 第三章 「入道死去」に見られる清盛像

#### 第一節 「二位殿の夢」と世評

同廿七日前右大將宗盛卿、源氏追討の為に東国へ既に門出と聞かえしが、入道相国違例の御心地とてとどまり給ひぬ。明くる廿八日より、重病をうけ給へりとて、京中、六波羅、「すはしつる事を」とぞささやきける。

(巻第六「入道死去」P 449)

ここには、平清盛が重病にかかった、ということと、それを聞いた世人の反応が書いてある。人々は、清盛が病気になるという事を知ると、「なにかがおこると思っていたら、はたして病気になるぞ」と言い合ったというのである。

奈良の東大寺・興福寺を焼失させた清盛に対して人々は、必ずその報いをうけるに違いないと信じていた。そこに、清盛重病の報が入る。人々は即座に、「ああ、これこそあの事件の報いなのだな。



清盛は今、仏の罰をうけているのだ」と確信したのである。

こうした清盛の病気を「仏罰」として捉えようとした人々の意識は、清盛の病状の描写にも反映されている。

比叡山より千手井の水をくみいだし石の舟にたたえて、それにおりてひえ給へば、水おびただしくわきあがって、程なく湯にぞなりにける。もしやたすかり給ふと覺の水をまかせたれば、石やくろがねななどの焼けたるように、水ほとばしって寄りつかず。おのづからあたる水は、ほむらとなつてもえければ、黒煙殿中にみち／＼て、炎うづまいてあがりけり。

（巻第六「入道死去」P 449～450）

これらの表現は、単に清盛の病の重さ、その苦しみの激しさのみを伝えるものではない。これは、明らかに焦熱地獄を意識した表現であり、仏罰によって清盛が地獄に墮ちるのだということを確認し、それを暗示したものである。

さらに、もっと具体的に地獄に墮ちる清盛の運命を表現しているのが「二位殿の夢」である。「二位殿の夢」とはこうである。猛火がさかんに燃えている車を門の内へ引き入れた者があつた。車の前後には、馬や牛のような顔をした者が立っており、車の前には「無」という文字だけが見えた鉄の札がかかっている。閻魔の庁から清盛を迎えに来たのだという。二位殿が鉄の札の「無」について尋ねると、

南閻浮提金銅十六丈の盧遮那仏焼きほろぼし給へる罪によつて、無間の底に墮ち給ふべきよし閻魔の庁に御さだめ候が、無間の無をば書かれて、間の字をばいまだ書かれぬなり。

（巻第六「入道死去」P 450～451）

と答える。つまり清盛はこれまでに犯した罪によって、地獄へ墮ちる事が、すでに決まっているというのである。そのことは、清盛の仏罰は、その死後にまで及ぶものと確信する人々の意識を、はっきりと察知することができる。つまり、清盛は、今熱病に苦しむのみならず、死後も無間地獄へ墮ち、永遠に苦しまなければならぬ運命なのだという意識である。私はこの意識の根底には、清盛がそれだけの罪業の報いをうけなければ、自分達は救われないという執念が、人々の心の中に宿っていたからではないかと思う。

清盛によって処刑され、あるいは流罪になるなど、思いがけない悲惨な運命をなめさせられ、生きる希望を絶たれた者達の恨みや悲しみのほけ口として、悪人は必ずその報いをうけるものだという、因果応報の仏教思想を信じて救われたのである。彼らは、清盛を悪人として認識すると同時に、その罪業の深さの応報を、神や仏の超人的な力に委ねようとしたのではないだろうか。そうした人々の思考や信仰から、仏罰によって無間地獄に墮ちてゆく清盛の姿を想像し、そうした因果応報の実相をお互いに語りあううちに、「二位殿の夢」のような説話が形成されていったのではないかと考えられる。

## 第二節 遺言から考察される清盛像

「奈良炎上」という事件に対して、人々は一様に清盛に仏罰が下ることを信じた。そして、清盛の突然の奇病こそその報いであると肯定した。では清盛自身は、東大寺・興福寺の焼失事件をどのように捉えていたか。『平家物語』によれば、重衡が南都を滅ぼして帰京した時の清盛の様子を次の様に述べている。

入道相国ばかりぞいきどほりはれてよろこばれけれ

(巻第五「奈良炎上」P419)

この彼の態度からは、伽藍を焼滅した事に対する罪の意識は感じられない。罪の意識が感じられないというより、伽藍の焼失に関し、彼は全く無関心であるといつてよい。彼にとつて重要なのは、平家に反抗した奈良の僧兵との戦果のみであり、その勝負に関する事以外は、どんなことであれ、彼にとつては些細なことにすぎなかつたのである。

また、清盛の関心がいかに平家の繁栄のみにむけられていたかということは、彼の遺言からも十分に推察される。次に、彼の遺言を考察することによつて、清盛自身が自分の人生をどのように捉えていたか、彼はどのような考えを持つて生きてきたかということについて探つてみたい。

治承五年(一一八一年)二月二十七日の夜半突然清盛は発病する。彼の苦痛は人々に地獄を想像させるほどの激しさであった。生きながら焦熱地獄でその身を焼かれるような苦しみの中で、やがて訪れる「死」を意識した彼は、肉親の者達にこう言い放つのである。

われ保元・平治よりこのかた、度々の朝敵をたひらげ、勳賞身にあまり、かたじけなくも帝祖、太政大臣にいたり、栄花子孫に及ぶ。今生の望一事ものこる処なし。ただし思ひおく事としては、伊豆国の流人、前兵衛佐頼朝が頭を見ざりつるこそやすべからず。われいかにもなりなん後は、堂塔をもたて孝養をもすまへにかくべし。それぞ孝養にてあらんずる。

(巻第六「入道死去」P451~452)

この言葉の中には、六十四年間の生涯をふり返つた清盛の、自己の人生を肯定する態度があらわれているといえよう。

「朝敵を倒して出世し、天皇の外祖父として太政大臣になつた」と言う彼の心の中には、自分の力で、平家一門をここまで繁栄させてきたという自負があつた。そこには、自分の人生に対する懷疑や後悔は存在しない、ただただ誇りと満足だけがあつた。

「死」を意識した時、多くの人々は、まず来世往生を祈念する。

すなわち、現世でのあらゆる価値観を否定して、ひたすら仏の慈悲にすがり、極楽往生を願うものである。

平重盛、その息子維盛、建礼門院徳子、これらの人々はいずれも「死」に臨んで来世の極楽往生を願つた人達である。

「死」というものが「目にもみえず力にもかかはらぬ無常の殺鬼」(巻第六「入道死去」P453)である以上、人間は「死」によつて一方的に否定されるしかない。たとえ生きている間に、いかなる地位や名誉を得ようとも、それらの持つ価値は「死」によつて全て失われてしまうからである。そこで人々は、その絶対的否定者の「死」を前にした時、目を、現世から来世へと転じ、仏の慈悲にすがつて極楽往生を遂げ、永遠の安住を求めようとしたのである。

その仏の慈悲に頼ろうとした時に、現世で犯した自分の罪に苦しまなければならぬ者もある。例えば東大寺・興福寺の焼失事件時の大將軍、平重衡は、来世の往生を希求したが、生前の行いが仏の心になつていない故往生が望めないことに、嘆き苦しんだ人である。

この様に、「死」に臨んだ人々はいずれも極楽往生を願っていた

のに、清盛は、あくまで「現世」しか見ようとはしなかった。仏罰だと誰もが信じた熱病に苦しみながら、仏への懺悔どころか、源頼朝の首を落しておかなかったことを悔いる清盛である。彼はあくまでも現世に執着した。ここに清盛の死の独自性がある。

清盛の一生は、まさに戦いの一生であった。平家一門の繁栄の爲に、彼はあらゆるものと戦った。人はそれを「王法」・「仏法」に対する悪行とし、その執行者清盛を「悪人」として位置づけた。しかし清盛はそれを無視して、自分の信じる道をひたすら突き進んだ人物である。もしも彼が、「死」という「無常の殺鬼」の前で、すなおに仏の慈悲にすがって来世の往生を願ったとしたら、彼が全身で戦い生きぬいてきたことの意義は全て失われてしまうことになる。自我意識の人清盛は、自らの生の意義を否定することはできなかった。彼は、自分の死後に仏堂や塔を建てて供養されることをはつきりと拒絶している。即ち彼は、仏縁をきっぱりと振り切り、あくまでも現世のみに価値を見出そうとしている清盛の激しい強固な意志を知ることができる。

清盛は、平家一門の繁栄の中に、自分の「生」の意義を残そうとした。そうすることによって「死」という「無常の殺鬼」をさえ無視しようとしたのである。だからこそ彼は、「頼朝の首を、墓の前に持つてくることこそ供養」と遺言したのである。平家一門の繁栄を妨げようとする者の存在を、彼は最後の最後まで決して許さなかったのである。

この様に、「死」をも「仏」をも否定して、ひたすら自分の意志を貫こうとした清盛のすさまじい執念は、「諸行無常」という当時の社会全般の人生観にたつ人々には、とても理解することは不可能

なものであったろう。それゆえ『平家物語』では、彼の遺言を「罪ふかけれ」（巻第六「入道死去」P452）と評しているのである。

彼の思考や行為は、その激しさ故に、遂に誰からも理解されなかった。しかし自我の赴くままに真正直に生き抜いた彼の生活態度に、人間本来の自我意識の実相をみる事ができる。ただし、彼はその自我意識の強さ故に、世人から恨まれ「悪人」とよばれるようになったのである。もし彼が、強烈に自我を主張し実行する意志を持っていなかったとするならば、おそらく、平家のあの異常なまでの繁栄は実現しなかったであろう。

## おわりに

清盛の人間像を考察する為には、彼の内面について考えていくうちに、遠い過去に生きた一大政治家である平清盛という人物が、非常に身近な人として感じられるようになってきた。清盛は「悪人」と評価されているが、彼はただ、自分とその一族の繁栄を守りたいという人間本来の肉親的な真情を忠実に生き抜いた人で、ある意味では、非常に人間的で正直な人物であったともいえよう。彼のこうした一面は、今の私達と決して無関係ではないと思う。なぜならば、スケールこそ違うけれども、自分さえよければ他人のことは無関心という利己主義な考え方は、清盛同様、私達も持っているからである。あの清盛の激しい生き方の裏面には、踏み躪られた多くの人々がいたことも、私達は決して忘れてはならない。

さて、出来上がった論文を改めて読み返してみると、未熟な点ばかりが目につく。もつと時間をかけていねいに勉強すればよかったという反省が、強く心に残る。とにもかくにもこの一年間、まが

りなりに、清盛という人物の内面と、彼を含む社会との二面から考察してみる機会を得たことは、まことに嬉しかった。今後社会人として、様々な人達とつきあってゆく上で、何らかの手引きになってくれるのではないかと思うからである。

卒業論文の提出という課題は、確かに一つの重荷ではあったがしかし、論文を手懸けたことよって、今まで知らなかった多くの貴重な体験を得ることができた。論文作成という共通の目的に向かって、お互いにはげまし合ったり、意見を交換したりする友人を得、いつそうの親交を深めることもできた。これらの得難い経験を持って卒業できることを私は心から喜んでいる。

## 参 考 文 献

『平家物語(一)』(日本古典文学全集29)

市古貞次校注・訳 小学館(昭48)

『平家物語(上)(中)(下)』(新潮日本古典集成)

水原一校注 新潮社(昭54)

『平家物語』—変革期の人間群像—

富倉徳次郎 NHKブックス151(昭54)

『平家物語』

石母田正 岩波新書(青版)(昭32)

『平家物語』(日本古典鑑賞講座第十一卷)

高木市之助・富倉徳次郎共編 角川書店(昭38)

『平家物語の研究』

青木 孝 續文堂(昭39)

『国文学—解釈と鑑賞—』

至文堂  
「清盛」松本新八郎(昭32・9月号)

『国文学—解釈と鑑賞—』 至文堂

『平家物語の死の諸相』渡辺貞麿(昭57・6月号)

## 〔評〕

宮地さんの論文は本当に面白かった。それは紙面にみざる若々しい熱気をもるに感じたからである。宮地さんは、清盛の「悪」の評価の起因を次のように述べている。

「たけき人」・「おごれる人」という評価は、世人各自の主観的判断の共通分母の心情。王法への悪行は、清盛と対立した公卿達がみずから正当化するため、清盛の権勢を否定しようとする利己的評価。仏法への悪行は、「奈良炎上」という、清盛の仏教を軽視した暴挙に対する、大衆全般の怨嗟的评价。宮地さんは、この大事件を「偶発的」と推理して、三つの仮説をあげ「この事件の裏には、何か人力を越えた力が働いて、清盛に寺を焼かせたようにさえ感じらる」と述べている。さらに、清盛はその仏罰を蒙り、熱病で「あっち死」した悪人だと世人は確信する。この因果律の必然性が、「二位殿の夢」に説話化されたと説く独創的な考察はまことに興味深い。

清盛の遺言は彼の人間性を率直に語っている。傲慢な自尊心・臨終に頼朝の首を供養にと命じた執念は、無常観に生きる世人には理解する事はできなかった。彼の自愛的な実践力は平家一門に異例な繁栄をもたらしたが、世上の恨みを買っている。彼の赤裸々な自愛的な行動は「現代人のエゴイズムと同質だ」と説く宮地さんは、「彼は真正直に生き抜いた人だ」と評価して親近感さえ持っている。

終始、清盛に注いだ宮地さんの暖い温もりを感じざる誠実な論文だと思ふ。

(野崎アサエ)